



日本SPF豚協会だより

Report of JAPAN SPF Swine Association

2012.4 第47号



提◆言

SPF肉の信頼をさらに高めるために

ホクレン生産振興部部长 鳴海 清三

いきなり私事で恐縮ですが、昨年2月に今の職場に配属となり、弊会に入会して初めてSPF豚の事業に携わることになりました。

豚そのものに係る知識も乏しく、職場の仲間や生産者の方々から基礎の、さらにその前の基礎から学び、支えられながら業務を行っております。まだ新米の域をでない私ではありますが、SPF豚に携わったこの1年間で今、感じていることを述べたいと思います。

私どもホクレンが本格的にSPF豚生産事業に取り組んだのは平成3年のことでした。この間、日本SPF豚協会をはじめ、多くの関係機関からご指導いただき、何より、ホクレンSPFピラミッドに結集する生産者の皆さんの真摯な取り組みにより、事業が進展してまいりました。しかし、好事魔多しです。平成21年、私どもの初の直営SPF農場で排除対象疾病が発生してしまいました。1年かけて完全オールアウトによる清浄化・SPF再変換作業を行って昨年6月に再認定を受けましたが、農場のSPF状態を維持することがいかに重要かを改めて認識させられた出来事でありました。あわせて、SPF状態をどのようにして確認していけばよいのかなど、知識が浅いながらもあれこれ思いを巡らすことになりました。

コマーシャル農場のSPF状態を確認する手段、認定する要件として、協会が定めるSPF豚認定規則では、年1回以上のヘルスチェックを義務付け、認定期間中であっても「認定農場は重大な異変が生じた場合、すみやかにピラミッド委員会に届出て、その指示または指導に従わなければならない」とあります。ホクレン・ピラミッドでは、これまで年1回、認定期限の1～2月前の「と畜場SPF検定」を主体に行ってきましたが、今般、清浄性をより担保する意味から認定期

間中の農場の衛生状況を確認する必要性とその方法について協議、決定いたしました。これは、各農場とピラミッド委員の間で、年間を通して衛生状況に関する情報を共有することにより、異常の早期発見、早期対応が可能となり、万一の際の農場被害の軽減とSPF状態への早期復帰が期待できるという考えのもとに取り進めたものです。

SPF養豚は、衛生管理の改善や生産成績の向上を図るための豚肉生産システムと理解しておりますが、豚を健康に育てることにより結果として、消費者から臭みがなく、おいしい肉という評価をいただいております。

一方、世間ではSPFポークと同じような特長を強調した“銘柄豚”が少なからずあります。赤池協会最高顧問はこうした状況を憂い、協会だより第25号で、「SPFポークがその中に埋没してしまっただけでは今までの苦労が水の泡になる」と警鐘を鳴らし、認定制度のPRと認定シールの活用を呼びかけられました。

私どもはSPF豚生産事業の開始に合わせ、「おいしさと安心」をPRし、SPF豚肉の差別化販売に取り組んでまいりましたが、現在、豚肉取扱の約3割強をSPF豚肉が占めるまでになり、北海道で販売されている豚肉の一大ブランドに成長いたしました。その分、ピラミッドも生産者の皆さんも常に緊張感を持ち続けることが求められております。

消費者の皆様の支持を一層拡げていくには、さらなる販売戦略や新たな付加価値の創造が求められますが、その根幹はやはりSPF豚の優位性と信頼性の維持にあると思います。これからも私どもは生産者の皆さんと一体となって、「安全、安心、おいしい」SPF豚肉の生産に取り組んでまいりたいと考えております。

SPF種豚と認定農場の分布

(2012年3月末現在)

表1. 認定農場の分布

飼養母豚数	北海道	東北	関東	北信越	東海近畿	中四国	九州	合計	母豚総頭数
99以下	2	0	6	0	1	3	0	12	735
100～299	7	7	27	5	1	1	7	55	10,333
300～599	4	5	8	3	1	8	8	37	15,329
600～999	2	12	2	2	0	2	6	26	21,077
1,000以上	0	10	4	0	0	1	9	24	31,587
計	15	34	47	10	3	15	30	154	79,061
育成・肥育専門農場	1	5	9	5	0	1	12	33	
合計	16	39	56	15	3	16	42	187	
母豚総頭数	4,406	26,310	14,885	3,693	758	6,687	22,322	79,061	

表2. 認定農場数および飼養母豚数の推移

地域	2007年度		2008年度		2009年度		2010年度		2100年度	
	農場数	飼養母豚数								
北海道	15	3,590	15	4,962	15	4,714	15	4,722	15	4,406
東北	35	23,227	35	26,285	35	26,459	34	26,076	34	26,310
関東	57	14,327	50	13,567	51	14,020	49	14,260	47	14,885
北信越	11	3,782	11	3,812	10	3,682	10	3,687	10	3,693
東海近畿	2	792	3	218	3	215	3	793	3	758
中四国	16	6,569	18	7,118	16	6,635	16	6,620	15	6,687
九州	32	19,439	28	19,182	30	22,403	30	21,337	30	22,322
育成・肥育専門農場	17		24		27		33		33	
全国	185	71,726	184	75,144	187	78,128	190	77,495	187	79,061

やむを得ない事情により認定を休止している農場については、戸数は集計に含め頭数は含めない。認定農場数は187（G P・G P農場19、子豚育成・肉豚肥育専門農場含む）、飼養母豚数は7万9,000頭を超えた。農場数は横ばいながら、飼養頭数が1,500頭以上も増加したのは、小規模農場が認定を取り止める一方で、口蹄疫の影響を受けた宮崎県の農場ははじめ認定休止中だった農場が復活したことや、いくつかの大型農場の増頭による。地域別では九州と関東において増加傾向にある。全国の飼養母豚数90.2万頭（畜産統計、平成23年2月現在）に占める認定農場S P F豚の割合は8.8%と、前年度と比較し0.5ポイント上昇した。

CM認定農場の生産成績

(2011年度)

表1 一貫生産農場

	件数	母豚数	生産指数	農場回転率		農場飼料要求率		出荷頭数/母豚		A薬品費/肉豚	
				実績	指数	実績	指数	実績	指数	実績	指数
基準値	116	平均	100.00	1.70	15.00	3.19	25.00	21.35	40.00	286	20.00
A	29	532	122.46	1.90	16.74	3.09	25.80	22.85	42.81	41	37.11
B	29	382	111.26	1.74	15.35	3.27	24.40	21.05	39.44	113	32.06
C	29	301	103.87	1.64	14.43	3.41	23.30	20.50	38.40	175	27.74
D	29	606	94.66	1.71	15.10	3.35	23.72	20.99	39.32	336	16.52
最高成績			131.03	2.24	19.73	2.86	27.61	25.61	47.98	0	40.00
最低成績			80.92	1.06	9.35	4.55	14.31	15.71	29.43	445	8.89
平均値		451	108.06	1.75	15.40	3.28	24.30	21.35	39.99	166	28.36

表2 繁殖専門農場Ⅱ（分娩・離乳後、子豚を育成し出荷している農場）

	件数	母豚数	生産指数	分娩回数／年		離乳頭数／母豚		出荷子豚数／母豚		A薬品費／子豚	
	9	平均		実績	指数	実績	指数	実績	指数	実績	指数
基準値			100.00	2.30	20.00	22.53	20.00	21.43	40.00	160	20.00
A	3	1,222	112.88	2.34	20.34	21.91	19.45	20.86	38.93	47	34.17
B	2	1,036	96.96	2.39	20.73	23.34	20.72	22.25	41.52	208	13.99
C	2	1,258	93.44	2.26	19.65	21.25	18.86	18.90	35.26	163	19.67
D	2	1,018	86.50	2.28	19.82	20.82	18.48	19.29	36.01	222	12.20
最高成績			118.41	2.46	21.37	23.83	21.15	23.14	43.19	35	35.63
最低成績			84.93	2.14	18.61	19.04	16.90	15.01	28.01	259	7.65
平均値		1,143	99.16	2.32	20.16	21.83	19.38	20.38	39.04	147	21.58

表3 繁殖専門農場Ⅰ（分娩・離乳後、直ちに出荷している農場）

	件数	母豚数	生産指数	分娩回数／年		離乳頭数／母豚		出荷子豚数／母豚		A薬品費／子豚	
	5	平均		実績	指数	実績	指数	実績	指数	実績	指数
基準値			100.00	2.30	20.00	22.53	20.00	22.53	40.00	90	20.00
平均値		877	121.98	2.50	21.77	26.44	23.47	26.44	46.95	46	29.79

表4 子豚育成農場（繁殖農場Ⅰから離乳子豚を導入し、肥育用素豚として出荷している農場）

	件数	出荷頭数	生産指数	1日平均増体重(g)		出荷率		A薬品費／子豚	
	3			平均	実績	指数	実績	指数	実績
基準値			100.00	445.00	40.00	95.00	40.00	70	20.00
平均値		40,098	124.27	525.47	47.23	98.47	55.52	65	21.51

表5 肥育専門農場Ⅱ（繁殖農場Ⅱまたは子豚育成農場から豚を導入し、肥育している農場）

	件数	出荷頭数	生産指数	農場飼料要求率		出荷率		A薬品費／子豚	
	15			平均	実績	指数	実績	指数	実績
基準値			100.00	3.30	55.00	97.50	25.00	126	20.00
A	4	5,413	128.50	2.64	66.04	98.63	36.23	87	26.24
B	4	10,239	104.38	3.20	56.63	98.60	35.95	178	11.79
C	4	20,234	92.29	3.54	51.10	98.10	31.00	188	10.19
D	3	6,967	85.85	3.94	44.25	98.02	30.18	180	11.43
最高成績			140.20	2.42	69.63	99.70	46.90	6	39.02
最低成績			84.50	3.97	43.86	96.60	16.00	237	2.44
平均値		10,963	103.88	3.29	55.19	98.36	33.55	156	15.14

表6 肥育専門農場Ⅰ（繁殖農場Ⅰから子豚を導入し、肥育している農場）

	件数	出荷頭数	生産指数	農場飼料要求率		出荷率		A薬品費／子豚	
	1			平均	実績	指数	実績	指数	実績
基準値			100.00	3.25	55.00	95.00	25.00	223	20.00
平均値		11,259	109.28	2.93	60.40	91.90	9.50	6	39.38

表7 肉豚または子豚1頭当たりA薬品費使用

一貫生産農場			繁殖専門農場Ⅱ			肥育専門農場Ⅱ		
薬品費／肉豚	農場数	平均金額	薬品費／子豚	農場数	平均金額	薬品費／肉豚	農場数	平均金額
100円未満	47	45	100円未満	4	52	100円未満	2	14
100円～199円	27	145	100円～199円	2	188	100円～199円	11	171
200円～299円	19	251	200円～299円	3	248	200円～240円	2	221
300円～399円	17	355	300円～320円	0				
400円～450円	6	419						
農場数	116	166	農場数	9	147	農場数	15	156
最高		0	最高		35	最高		6
最低		445	最低		259	最低		237
上位25%の平均	29	41	上位25%の平均	3	47	上位25%の平均	4	87

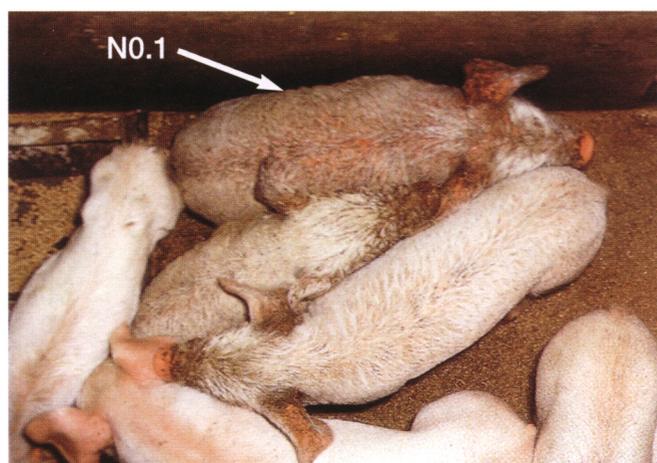
滲出性皮膚炎（スス病）

東京農業大学教授 山本 孝史

本病は19世紀中頃から知られている皮膚病で、哺乳豚や離乳したての子豚が急性あるいは甚急性に全身性の表皮炎を発症し、重症例では脱水により死亡します。通常、発生は散発的ですが、豚群を更新した場合などには多発することもあります。

原因と発病要因：*Staphylococcus hyicus*の産生する「表皮剥脱性毒素」が原因ですが、本毒素を産生しない非病原性の菌株も存在し、病変部からも両者が分離されます。*S.hyicus*は、健康豚の鼻腔、結膜、鼻部や耳の皮膚、雌豚の膣等に生息しています。また反芻獣や家禽からも分離されますが、これらは豚由来株とは異なり豚に対する病原性はなく感染源になることはありません。豚由来の病原性株を、ノトバイオオートやSPF等の免疫を持たない子豚の乱切した皮膚や皮下に接種することにより本病が再現できます。コンベンショナル豚では再現できないことが多いですが、これは発症には*S.hyicus*に対する免疫状態が大きく影響するからです。また、飼育形態の大規模化、早期の離乳、蜜飼等も本病の発症要因とされています。

本病は、ヒトの新生児に水疱形成や著しい表皮の剥離を来す「黄色ブドウ球菌性熱傷様皮膚症候群」に類似していますが、本病の原因菌は、病名から明らかな



感染した同腹豚。No.1は全身が黒ずみ、その下の2頭は耳や鼻部の黒ずみが顕著に認められる、他の3頭は正常（原図：参考文献）。

ように*S.aureus*であり、その中の表皮剥脱性毒素を産生する株が原因です。*S.aureus*の表皮剥脱性毒素は*S.hyicus*のそれとは異なり、豚の皮膚には病原性を示しません。

症状と病変：発症するのは4～6日齢の哺乳豚か5～6週齢の離乳豚が多く、突然元気消失して皮膚が赤色あるいは銅色になり、腋下やそけい部にうす茶色の滲出物が鱗状に見られます。3～5日で全身に広がり、急速に色は黒ずんで、またベトベトしてきます。食欲廃絶と脱水が特徴的で重症例では急速に痩せて、発病後3～10日以内に死亡します。痒がることはなく、発熱もないのが普通です。同腹豚の全てが同じように感染するわけではありません（写真）。回復期には皮膚は乾燥しかさぶたになります。生残豚の発育は遅延しますので感染豚群の生産性は約35%低下すると言われています。死亡豚はやせ細り、剖検すると脱水が著しく、体表リンパ節は水腫性で腫脹していますが、内臓諸臓器に特徴的な変化はありません。

治療と予防：治療は感染がわかったらすぐ始めないと効果はありません。*S.hyicus*は、各種の抗菌剤に容易に耐性化しますので注意が必要ですが、アンピシリン、セフトロフル、トリメトプリムとサルファ剤の合剤等の抗菌剤を全身的に投与するとともに、水を十分に与え、皮膚をセトリミドのような洗浄・消毒剤で洗って、乾燥後に亜鉛化オリーブ油やホウ酸軟膏のような保護剤を塗布します。予防には母豚の体表面を洗浄・消毒後、やはり洗浄消毒した清潔な分娩舎に入れるようにします。また感染は皮膚の傷口から菌が侵入することによるので、豚房の表面がざらざらしないよう、また床材にはおがくずや籾殻を敷く等の配慮が有効です。

<参考文献>

Smith, W. J. et al. (1990). A color atlas of diseases and disorders of the pig. Wolfe Publishing Ltd., 96-97.

豚舎周辺に生息するハエ類 I

イカリ消毒(株)技術研究所 木村 悟朗

ハエ目は、翅が2枚ある昆虫であり、学名のDipteraはDi=2とptera=翅の合成語です。現在は和名をカタカナで表記することが一般的になっていますが、かつてのように双翅目と表記したほうが特徴を理解しやすいかもしれません。ハエ目はハエ亜目とカ亜目に大別されます。ハエ亜目には直縫短角群と環縫短角群が含まれ、それぞれアブとハエの仲間となります。一方、カ亜目にはカの仲間が含まれます。ハエ亜目とカ亜目は、それぞれ短角亜目と長角亜目となり、触角が大きな特徴となります。一般にハエと呼ばれているものは、ハエ亜目環縫短角群のものとなります。

家屋内で発生する主なハエ亜目はノミバエ科、チーズバエ科、トゲハネバエ科、ショウジョウバエ科、ヒメイエバエ科、イエバエ科、ニクバエ科、ヤドリバエ科、およびクロバエ科などが知られています。これらのうち、いくつかの科はコバエ類とも呼ばれますが、コバエという分類群はなく、大型のハエに対して小さなハエという意味です。一般的にコバエは発育速度が速く、個体数が急激に増加し、不快害虫となります。本稿におけるハエ類はハエ亜目環縫短角群のうちの大型のハエを示すこととします。豚舎の飼育環境で主に発生するハエ類は、ヒメイエバエ類、イエバエ類、クロバエ類などです。もちろん、これらに加えてコバエ類も発生しています。ハエ類は微生物の伝播などを行うことから、衛生害虫と呼ばれます。ハエ類を防除するためには、形態的な特徴からそれらのある程度のレベルまで同定するとともに、各分類群または種レベルの生態的特徴を把握することが重要となります。これからの数回の連載で、豚舎で主要なハエ類の形態的特徴や生態について簡単に解説します。

ヒメイエバエ類

ヒメイエバエ類は日本から40種以上が記録されていますが、衛生害虫は数種程度です。ヒメイエバエ類で主要な害虫種としてヒメイエバエ(写真1)があります。本種は、体長4.5-7.0mm、黒褐色で細長く、胸背には3本の黒条、腹部には黄色の斑紋があります。複眼は赤褐色で、雌雄で複眼間の距離が異なります。翅は透明、脚は黒色です。成熟幼虫は約8.0mm、褐色で背腹は扁平です。背面と側面に多数の刺があります。この刺の形態と配列は種の特徴となります。特に、第12節の側面の突起の形態と第11節の背面の刺の形態と長さ

が重要です。

成虫は早春より活動し始めます。本号が発行される時期、地域によっては大量に飛翔しているかもしれません。成虫は、日中は家の中で輪を描くように飛び回り(輪舞)、夜間はほとんど天井に係留します。個体数は気温の上昇とともに少なくなります。本種は成虫で越冬しますが、幼虫や蛹でも越冬する可能性も指摘されています。



写真1 ヒメイエバエ成虫(富岡康浩氏原図)



写真2 ヒメイエバエ幼虫(富岡康浩氏原図)

本種の幼虫は、動植物性の腐敗物、動物の死体、ニワトリ、ウシ、ブタなどの家畜糞、人糞、生ごみ、漬物、油粕などさまざまなものから発生します。イエバエやオオイエバエなどのように湿潤な環境では発生しないために、鶏舎はヒメイエバエにとって好適な生息環境となっており、しばしば大量発生して問題となっています。

本種の24℃条件下における卵期間は約3日、幼虫期間は11.3日、蛹期間は10.3日であり、約24日で卵から成虫になります。発育零点は0.5℃であり、低温に対する耐性が大きいことが知られています。

<参考文献>

伊東修四郎(1984) 屋内で発生する双翅目. 家屋害虫(日本家屋害虫学会編)pp.65-73. 井上書院, 東京、岩佐光啓(2003)ハエ類. 生活害虫の事典(佐藤仁彦編)pp.104-116. 朝倉書店, 東京、松崎沙和子・武衛和雄(1993)都市害虫百科. 236pp. 朝倉書店, 東京、篠永 哲(1988)家屋とハエ類-概説-. 家屋害虫2(日本家屋害虫学会編) pp.233-239. 井上書院, 東京、篠永 哲(1995)ハエ. 家屋害虫事典(日本家屋害虫学会編)pp.178-193. 井上書院, 東京、篠永 哲(1999)ハエ. 環境衛生管理技術大系ネズミ・害虫の衛生管理(芝崎 勲監修)pp.80-85. フジ・テクノシステム, 東京、篠永 哲(1999)コバエ. 環境衛生管理技術大系ネズミ・害虫の衛生管理(芝崎 勲監修)pp.86-90. フジ・テクノシステム, 東京。

紹介●SPFのお店⑬

ワイン懐石銀座 嘸shiya / ワインバル MA SALLE
東京都中央区銀座3-8-13 TEL03-3535-2227/03-6228-7889
<http://ginzahayashiya.com>

東京一の高級繁華街・銀座の、老舗デパート松屋の裏通りに、今回ご紹介する2軒のお店があります。

オーナーシェフの林 勝さんは、SPF豚専門店の総料理長や社長を12年務められたのち独立、一昨年の3月にワイン懐石「嘸shiya」をビルの地下1階にオープンさせました。コンセプトは、ご自身が「大ファン」という国産ワインと懐石料理をビストロ感覚で味わうというもの。「SPF豚はあっさりしていて和食に合うし、料理を引き立てる日本産のワインにぴったりなんです」。専門店で「おそらく日本で一番食べていた」というSPF豚のおいしさをもっと多くの人に知ってもらいたいと、さまざまなメニューを考案されています。

嘸shiyaはコース料理がメイン、アラカルトも提供し、もっと気軽に楽しんでもらいたいと考えていたところ、同じビルの1階店舗がたまたま空き、今年2月、ワインバル「MA SALLE」がオープンしました。

お店が2軒になったことで実現したのがSPF豚の1頭買い。協会でもおなじみ、北海道の認定農場・(有)道南アグロ産の「ひこま豚」を購入しています。ローストポークや生ベーコンなどさすがのおいしさ、でした。おすすめは、余りがちなモモやカタをどうするか悩んだ末思いついた「パテ」。ミンチにしたものを材料に毎日手作りしており、ワインにぴったり。以前同僚だった小貫健



林勝オーナーシェフ（右から2人目）とスタッフの皆さん



嘸shiyaの店内（写真左上）、MA SALLEの外観（左下）と店内（右下）

介店長も「お客さんの評判もとてもいいです」と太鼓判。若い4人で両店を切り盛りされていて、おいしさと雰囲気よさでどちらも大盛況。お近くにお出での際はぜひお立ち寄りになってみてはいかがでしょうか。その際にご予約をおすすめします。

●協会からのお知らせ●

●代議員・理事の交代

組織内人事異動により中・四国地区選出代議員で理事の船本秀和氏（株西日本ジェイエイ畜産）に代わり、小椋和典氏が就任されました。

●理事会を延期

平成23年度の理事会を3月30日（金）、協会事務所に

て開催、6月の総会に諮る議事等について協議いたしました。

●代議員会を6月に開催

今年度の代議員会（社員総会）は6月13日（木）開催の予定です。代議員の皆さまには後日ご案内をお送りいたします。次号に詳細を掲載いたします。

●SPF豚研究会から●

●研究会は7月に開催される予定です

第22回日本SPF豚研究会は、7月下旬の開催を予定しております。研究会会員の方の参加費は無料です。6月には会員の方にご案内が届くと思いますが、

次号にて詳細をご案内いたします。ご不明な点等ありましたら日本SPF豚研究会事務局（伊藤忠飼料(株)研究所内）までお問い合わせ下さい。

TEL:0287-64-3652 FAX:0287-63-8384

肩ロースの南仏風香草パン粉焼き 季節野菜とさわやかレモン風味のソース添え

●レシピ提供・「南フランス料理気まぐれ市場」オーナーシェフ 平川 了児（京都府八幡市）

今回のレシピはフランス料理のシェフにご紹介いただきました。素材にこだわり、北海道から認定農場産SPFポークを取り寄せている方です。さすが見た目おしゃれですが、家でも作れそうな逸品です。ぜひお試しを。

●材料●（4人前）

SPF豚肩ロース（100g程度） 4枚
季節の生野菜（ベビーリーフなどお好みで） 適量
じゃがいもまたはかぼちゃをスライスしたもの 4枚
乱切りしたトマト 1個分
香草入りパン粉 適量
（粗めのパン粉とパセリのみじん切りを混ぜたもの）
白ワイン 100cc
レモンの絞り汁 2分の1個分
オリーブ油 適量
塩・黒粒こしょう 少々

●作り方●

- ① 豚肉は塩・こしょうをして1時間ほど冷蔵庫に入れておきます。
- ② お好みの生野菜を切り混ぜておきます。
- ③ じゃがいもかかぼちゃを、オリーブ油と塩・こしょうをかけ、やわらかく焼きます。
- ④ フライパンにオリーブ油を入れ、①を上になる面から中火で焼きます。こんがり焼き色がついたら裏返し、白ワインを入れて、弱火で2分火を通します。
- ⑤ もう一度裏返したらトマトと香草パン粉を乗せオープンでパン粉に焼き色をつけます。
- ⑥ サラダを皿に盛って③を置きその上に⑤を乗せます。
- ⑦ フライパンにレモン汁とオリーブ油（できればヴァージン油）を入れ塩・こしょうで味を調え肉の上にかけます。

【平川シェフからのアドバイス】

SPFポークはあっさりしていますから、塩・こしょうはやや多めに使います。

香ばしさとさわやかな風味を味わう一品ですので、レモン汁はぜひ入れてみましょう。ライムなどでも結構です。



●認定情報●

●平成24年度認定農場

[3月認定] (有効期間:平成24年3月8日から25年3月31日まで)

北海道・全農飼料畜産中央研究所上士幌種豚育種研究室、秋田県・(有)十和田湖高原ファーム、全農畜産サービス(株)由利本荘SPF豚センター、(株)ユキザワ雪沢GP、宮城県・サンエス丸森農場、茨城県・(有)中村畜産、全農飼料畜産中央研究所、千葉県・飯田武雄養豚場、石毛章俊養豚場、鈴木良雄養豚場、飯田養豚、(株)シムコ館山事業所、(有)ピギー・ジョイ第2農場繁殖農場、(有)ピギー・ジョイ第2農場肥育農場、(有)伊藤養豚飯岡農場、(有)鏑木ピッグファーム、長野県・(農)エスピー

エフこがねや第二農場、JA全農長野SPF繁殖センター、JA大北白馬アルプス農場、富山県・(株)シムコ八尾GGPセンター、島根県・奥出雲ファーム(有)、愛媛県・JAえひめアイツパクス(株)天貢農場、熊本県・全農畜産サービス(株)西日本原種豚場、新古閑養豚(農)、(有)七城SPFファーム、(有)やまとんファーム、(有)ピッグファーム陳、宮崎県・(有)守山畜産、鹿児島県・鹿児島島いずみ畜産(株)出水農場、鹿児島島いずみ畜産(株)阿久根農場 (以上30農場)

※次回認定委員会は平成24年6月7日の予定



サンエス大渡農場
沼尾 昌俊さん
●栃木県日光市

少数精鋭 高い目標を掲げ農場運営

サンエス大渡農場は平成12年7月、住商飼料畜産(株)の原原種(GGP)農場を(株)サンエスブリーディングが引き継いだGGP農場です。農場は防疫に配慮し大谷(だいや)川の河川敷を利用して運営、3種類の純粋種を飼育しています。雌170頭、雄40頭の規模です。

場長の沼尾昌俊さん(55歳)は地元である旧今市市(現日光市)のご出身。実家が米、野菜を生産する農家ということもあって、幼い頃から農業が大好きだったそうで、現在でも、休日にはお父さんといっしょに米作りや野菜作りをしているそうです。

昭和52年3月に東京の大学を卒業と同時に当時の住商飼料畜産(株)に入社、鬼怒川原種豚農場(GP農場)、大渡農場(GGP農場)で、SPF豚のブリーディング一筋に歩んでこられました。

日光といえば東照宮や世界一の杉並木、日本人なら知らない人がいないくらい有名で、平成11年には世界遺産にも登録された、わが国が誇る観光地です。養豚生産者にとって糞尿処理対策は頭の痛い問題ですが、このような環境下では「なかなか気が休まるときがない」と沼尾さん。臭気対策には人一倍気をつかうそうです。

従業員は場内が4人、場外(糞尿処理)が1名の計5名、少人数での運営なので、前もって1ヶ月の作業予定を入念に相談し、決定していくことに場長としての苦労があるようです。



沼尾さん(右から2人目)と農場の皆さん

また、この地域は、夏季に高湿多雨、冬季に乾燥少雨という典型的な太平洋側気候です。特に困るのは、夏の夜の落雷が非常に多いこと。この辺の雷は落ちてから横に走ることで有名だそうです。ほぼ毎年、最低でも1回は電気系統に影響を受けるとか。ウインドレス豚舎なので換気扇への影響が一番心配されるのですが、「雷が落ちたらしいという情報が入ると、従業員全員が、たとえ夜中でも機械の点検に農場へ集まってくれる。とてもありがたいことです」と沼尾さん。

沼尾さんは二人の娘さんと息子さんが一人おられ、娘さん二人はともにご結婚、お孫さんが一人。「残念ながら養豚家に嫁いだわけではない」そうです。

沼尾さんは「従業員一同、種豚の良し悪しが一貫生産農場の経営を大きく左右することは十二分に認識しています。できる限り繁殖成績に優れる種豚を提供し、ひいては消費者に安全でおいしい豚肉を届ける、という大きな目標を常に意識しています」。また、「ブリーディングはなかなか机の上で考えているようにはいきませんが、やりがいのある仕事に間違いありません」とサンエスブリーディングピラミッドを支える基幹農場の場長として、その意気込みを語ってくださいました。(株)サンエスブリーディング 佐野 公春)

編集後記 東日本大震災から1年が経過しました。災害に対し備えを磐石にすることは至難の業と感じた方もおられるでしょう。しかしやはり「備えあれば憂いなし」です。特にSPF豚農場においては疾病対策を踏まえた災害対策が不可欠です。生産システム崩壊がSPF状態の維持を危うくするからです。日頃からSPF状態維持のための危機管理対策を考えておきましょう。日々の管理の中「常にSPF状態が保たれているかどうか」の観察は当たり前のようですが、大変重要です。その確信こそがSPF豚の優位性と信頼性につながるからです。(世)



日本SPF豚協会認定農場産シール
このマークは
日本SPF豚協会の
登録商標です

日本SPF豚協会だより

第47号 2012年4月1日発行(季刊)
発行 一般社団法人 日本SPF豚協会
〒101-0032 東京都千代田区岩本町1-8-2
TEL.03-5835-5375 FAX.03-5835-5376
e-mail : j.spf.a@nifty.com
http://www.j-spf.com/
発行人 北島 克好
編集人 藤田 世秀